

京本通俗小説と清平山堂

長澤規矩也

一 敍 説

支那に於ける語り物や辻講釋(註)ともいふべき民衆相手の文學の淵源を尋ね、之と戯曲や小説との關係を考へることは、從來あまり人が手をつけてゐないだけに難しくもあるが、又興味深い問題であると思はれる。抑々支那に於ける民間の戯曲は、一方に於て朝廷の舞樂との間に深い關係を有してゐるものもあるが、又一方に於ては所謂語り物の進歩したものと考へられる。又口語體の小説にもかなり著しく説話の影響がある。かう考へてくると、如何に低級なものであるからといつて、語り物や辻講釋の類を文學史上の考察から除き去ることは不都合であら

う。殊に其等と戯曲・小説との間に於ける資料の一致といふ點を考へると尙更のことである。

然らば支那の語り物は何時始つたのであらうか、例の燉煌物の中には、宗教的臭味が漲つてはゐるが語り物の形式を有するものがある。宋一代の間は大體からいへば南北を通じて漢人と北虜との争で終始したけれど、北宋の仁宗の頃は太平稍々久しく、文物が鬱然として勃興した。小説が宋の仁宗に起るといはれるのはこんなわけであらう。兎に角、此太平の世に、首都汴京の民衆娛樂が發展したことは事實らしい。

宋代の民衆文學の首都に於ける開展状態は幸にも多少文獻が傳つてゐて、大體想像し得るが、其等については鹽谷博士が己に詳しく述べてゐられるし、狩野博士・魯迅(周樹人)氏も其前に説かれたから細述の必要はない、たゞ私は宋の民衆文學の賑つた時代を必ずしも北の仁宗、南の孝宗と限りたくない。

仁宗の時に發展したものは、争亂の再發と共に衰微してしまつたとはいへまい、其理由を詳論するのは暫くおいても、かの孟元老が東京夢華錄の序に徽宗朝の汴京の状況を

僕從先人。官游南北。崇寧癸未。到京師。……太平日久。人物繁阜。垂髫之童但習鼓舞。斑白之老不識干戈。

といつてゐるのは、太平に慣れて、而も目前の政局の推移には直接の關係なく、いざとなれば没法子といつてあきらめ、萬事を成行に任せるより外に仕様のない一般民衆の状態をよく描いてゐるものであらう。此は宋の南渡と共に文物も南遷した南宋に於ても同様であつたらう。

金元の際に戯曲が勃興して、語り物などの内容もかなり多く之に採られたらしい。戯曲からみれば、語り物はごく幼稚なもので、従つて全く之に壓倒されてしまひさうなものではあるが、下流民にはやは

り戯曲ほど高尚でなく、そして手軽に聽ける語り物が依然として歓迎される、明清然り、現代亦然りである。

併し、低級なものについての記述は、後世に傳はるやうな高尚な書物中には殆どないから、文献上から考證を企てることは至つて難しい、どうしてもかなり想像説を交へねばならない、それには相當に年月を要する。青木學士が戯曲研究につれて、語り物についても十分に研究もされ、已に其一部分を發表もされた^①、余も一昨年来鹽谷博士の下に明末の短篇小説集といはれてゐる「三言二拍」^②を調べてゐて驥尾に附して多少なりと語り物と戯曲・小説との關係を考へてみたいと思つた。其文學史的考察には前述の如く零碎な史料より蒐らず、従つてそれには許多の危険な段階があるので、其方面は後日に譲つておいて、先づ普通趙宋の譚詞小説として世に紹介されてゐるものの一である京本通俗小説及び、昨夏我

が内閣文庫に於て氣附いた清平山堂と短篇四種とについて考へ、それに附隨して三言二拍との内容的比較を試みることにする。

二 京本通俗小説

京本通俗小説は「煙畫東堂小品」といふ叢書中の一部として、民國初年に繆荃孫によつて世に紹介された。此は卷十から卷十六に至る零本で、宋元坊刻本の字體を具へた本であり、同書の旃蒙單闕(乙卯、民國四年)、江東老蟬(繆荃孫)の跋によれば、所依の本は的に影元人寫本と覺ゆる鈔本四冊、其三冊には錢會の舊藏印があり、首に「京本通俗小説第幾卷」とあるといふ。

七卷の内容は

碾玉觀音 菩薩蠻 西山一窟鬼 志誠趙主管 拗
相公 錯斬崔寧 馮玉梅團圓

京本通俗小説と清平山堂

であるが、跋によると、其外に定山三怪の一回は破碎甚しく、金主亮荒淫の兩卷は穢褻に過ぎてゐるので此刻本中に加へなかつたといふ。

繆荃孫に後れて葉德輝が京本通俗小説第二十一と卷題して刊行した金虜海陵王荒淫といふ單行本があるが、この本には疑ふべき點が尠くない。此本は

(1) 木板白紙本二冊、見返に「己未孟冬照宋本刊」とある、己未は民國八年。

(2) (1) 鉛印假裝本二冊、奥付によれば民國十三年上海新民書局刊、「著者葉德輝」とある。

(3) 前者を白紙に摺つて二冊の唐本に仕立てたもの、奥付はないが、見返の文字は(1)と同じである。

(3) 鉛印白紙本二冊、此が最も世上に行はれてゐるもので、見返に「乙丑孟夏照宋本刊」と

ある。字詰は(2)と同じである。

の三版を見てゐるが、形式から見ても、内容から見ても、(1)によつて(2)が、(2)(ロ)によつて(3)が印刷されたものと考へられる。まづ(1)が如何にして刊行されたかゞ問題であるが、往年諸橋轍次氏が葉德輝を訪はれた時に親しく貰つて來られた本が(1)であるから、(1)が葉氏の家刻本であることは確である。

然るに前述の京本通俗小説の繆氏の跋には

金主亮荒淫兩卷。過於穢褻。

とあつて、篇名と卷數とが此本と異つてゐる。それのみならず、繆氏の言に依れば、其據つた原書は前述の如く「的是影元人寫本」と思はれる鈔本である。單行本の郎園即ち葉德輝の跋には

此京本通俗小説中之二十一卷。……京本小説。

爲虞山錢遵王述古堂藏書。其前碾玉觀音・馮玉梅團圓・拗相公・西南一窟鬼等七種。已經藝風老

人影寫刊行。餘此一卷。以穢褻棄之。

とあり、いかにも此單行本も藝風老人即ち繆荃孫の據つた本に據つたやうに見えるが、それならば「照宋本刊」とはいへない筈である。さりとて、別に宋本といひうるテキストを葉氏が得たものならば、固よりそのことを特筆大書したであらう。且又諸橋氏は勿論、葉氏の二三の門人も、同書の原本の所在については一言も葉氏から聞かなかつたといふ。又近刊の郎園讀書志卷六にも「影宋京本通俗小説金虜海陵王荒淫一卷」の一文があり、其題下には「影宋刻本」と注してある。これが葉氏家刻本の據つた原本に對する跋ならば、今度は其原本は宋槧本ではなくて、影宋刻本である。それにして繆荃孫の據つた本とは一致しない。其跋文を見ると、單行本の跋よりも其首に

此影宋本通俗小説小字本。每葉二十四行。每行十八字。版長工部尺四寸。寬半版三寸弱。卷首

標題估小行三行。云京本通俗小説第廿一卷。二行低一格。小字云金虜海陵王荒淫。三行四行低二格。七言絶句引起一首。

だけ加はつてゐる。郎園讀書志は其序によれば葉德輝生前の編纂らしいが、いかに正しい覆刻本は原本通りにゆくとはいへ、此跋はやはり「影宋刻本」の文字から考へれば、葉氏の家刻本に對する跋のやうである。さうすれば、此「影宋刻本」の四字は片がつくが、其代りに何故に原本に對する跋を作つて此讀書志に入れなかつたかと疑ひたくなる。その上、葉氏の跋中には、口を極めて正史と記載が一致してゐることを述べ、更に再び之に跋して、篇中の諺語や俗言が今もなほ通行されてゐることを例を擧げて説明してゐながら、繆荃孫もいはなかつたとはいへ、當時それほど珍本ではない醒世恆言との關係については一言も觸れてゐないことは、博識な葉德輝としては、稍々故らめ

いてゐるやうに考へられてならない、疑を葉氏一人にかけることはどうかとも思ひ乍らも。

更に其内容については、之を醒世恆言第二十三卷金海陵縱欲亡身と比較すると大同小異、殊に葉敬池刊本(註)よりは通行の衍慶堂刊本と正誤共に一致する所が多い。甚しい差異は僅か二つ、即ち初の部分の

我朝端平皇帝。破滅金國。直取三京。軍士回杭。帶得虜中書籍不少。一本專說金主海陵庶人貪淫無道。年號初次天德三年。……

が恆言には

如今說這金海陵。乃是大金國一朝聰明天子。只爲貪淫無道。蔑禮敗倫。坐了十二年寶位。改了三个年號。初次天德三年。……

となつてゐる。一讀した所、却つて恆言の文の方が素直で、特に年號の二字のつづき方などは恆言の方が遙によささうである。金虜から得た本が少

くないなどといふのはいかにも勿體ぶつた書き振りで、又此文の首に我朝といひ乍ら此文のつづきに

初次天徳三年。二次正元。也是三年。末次正隆六年。到正隆六年。大舉侵宋。……

とあるやうでは宋本のまゝとはいひ兼ねる。

又卷末に近く、此本には「禿禿光光一個瓜」云と「古寺門前一個僧」云々との二首の淫詩があるが、衍慶堂本恆言には更に一首あり、葉敬池本恆言には淫詩合計四首、海陵と關懶とが二首づつ詠んで問答したることになつてゐる。文勢によつて見れば葉敬池本が最も完全であり、衍慶堂本は誤つて一首を脱したものであらう。元來二首のものゝ恆言が四首に増したと考へるよりも、寧ろその奇耦を考へて、ことさら一首を削つて二首にしたものが此本であると考へたい。なほ半ば過ぎの大理寺明法の一句は、恆言に五城兵馬司とあるのを

故意に宋の話本らしく改めたかも知れない。

要するに此單行本は衍慶堂本恆言による偽作物で、繆荃孫のいふ所のものでないと認める。故に本篇に於ては余は之を京本通俗小説の一篇とは取扱はないことにする。

然るに錢曾の也是園藏書目卷十、宋人詞話の條には

燈花婆婆 種瓜張老 紫羅蓋頭 女報冤

風吹驕兒 錯斬崔寧 山亭兒 西湖三塔

馮玉梅團圓 簡帖和尚 李煥生五陣雨 小金錢

の十二種を著録し、現在の京本通俗小説七篇中の錯斬崔寧・馮玉梅團圓の二種が、此中に見ゆることは己に繆氏が其跋にいつてゐる。

さて通俗小説七篇の内、錯斬崔寧が夙に狩野博士のいはれたやうに明末の醒世恆言に見え、他の六卷が近く鹽谷博士の擧げられた如く、同じく明末の警

世通言に載せられてゐて、何れも本文が互に大同小異であるから、従つて也是園藏書目に見ゆる山亭兒は警世通言の萬秀娘仇報山亭兒、簡帖和尚は古今小説の簡帖僧巧騙皇甫妻、種瓜張老是馬廉氏の余に語られた如く、古今小説の張古老種瓜娶文女と大同小異のものであらう。又通俗小説の未刻の二篇も、定山三怪は警世通言の崔衙内白鶴招妖と、金主亮荒淫は醒世恆言の金海陵縱欲亡身と、話の筋は同様であらう。

殊に以上諸篇が互に同じものであることは、本文の比較をせずとも、錯斬崔寧は恆言の題は十五貫戲言成巧禍であるが、題下の注に「宋本作錯斬崔寧」と明言してあり、碾玉觀音は通言に崔待詔生死冤家と題して、「宋人小説舊名西山一窟鬼」と注し、定山三怪は同書に崔衙内白鶴招妖と題して、「古本作定山三怪、又云新羅白鶴」と注してあるだけでも大體わかる。

然らば京本通俗小説は果して宋代のものであらうか、原本の由來が明瞭でないから其決定には十分に内容を考證することが必要である。殊に繆荃孫も其跋に影宋鈔本とも、元人鈔本ともいはず、影元人鈔本と論定してゐる故、一層慎重に考へねばならぬ。繆氏は跋中に、かの二篇が也是園藏書目に見えてゐることを擧げた後、

所引詩詞。皆出宋人。雅韻欲流。並有可考者。如碾玉觀音一段。三鎮節度延安郡王指韓斬王。秦州雄武軍劉兩府是劉琦。楊和王是楊沂中。官衙均不錯。

と論じてゐるが、それよりも各篇が何時の話であるかといふことと、狩野博士が其論文中に、又鹽谷博士が其講義中に於て試みられた如く、籍中の時代の稱呼を吟味して見よう。

通俗小説七篇は何れも趙宋の事柄を扱つてゐる。而して其七篇中、我宋といひ、

後人論我宋元氣。都爲熙寧變法所壞。所以有靖康之禍(拗相公)。

此歌出自我宋建炎年間(馮玉梅團圓)。

又

我朝元豐年間(錯斬崔寧)。

といつてゐるのは、いかにも宋人らしい口吻であるし、外に

大宋高宗紹興年間(菩薩蠻)。

といひ、殊に宋をいはずにたゞ

紹興年間(碾玉觀音)。

紹興十年間(西山一窟鬼)。

東京汴州開封府(志誠張主管)。

却說高宗時。建都臨安(錯斬崔寧)。

高宗建炎四年(馮玉梅團圓)。

などと書き出してゐるのも、宋人の原作に據つたものらしい述べ方である。

這朝代不近不遠。是北宋神宗皇帝年間(拗相公)。

といふ書き方は丁度南宋の人の言らしい。たゞ

如今說先朝一個宰相(拗相公)。

といふ書法については嘗つて狩野博士が元人の言らしいと書かれたが、先朝の名稱は必ずしも前のダイナスティをのみ指すものではない、此場合には神宗より後の人の言とすれば差支はない、よつて南宋の人の言と斷定するのも穩當ではない。

然らば七篇の原作年代は大體宋らしく思へる、鹽谷博士は以前は大體南宋人の作と講義された。

然るにこゝに一つの疑點が生ずる、それは明末短篇小説集である前述の三言二拍には唐宋の話は澤山あるけれども、前に挙げた例以外に、宋本云々とか宋人小説云々とか注記した篇は全くない。即ち京本通俗小説に含まれてゐる篇以外には宋人の作に據つたと明記したものがないことになる。其他に一名云と⁽⁴⁾か、舊名云々と⁽⁵⁾か、漠然といつたものがあるばかりである。従つて此符合は通俗小説を信ずるとき

には即ち明末の短篇小説集は宋人小説の變形であるといふ證據になると共に、疑ふ側からいへばこの書が逆に明代の短篇小説集から作り上げられたものであるといふ一證にもなる譯である、時代の稱呼を適しくかへることは固より僞作者にとつては容易なことに過ぎない。

此問題は原本を見れば或は容易に解決しうることもかも知れない、併しそれが困難である余の立場としては何か別な解決法を講じなければならぬ、内閣文庫所藏の清平山堂は是に於て最も貴重な資料といはねばならない。

三 清平山堂

清平山堂殘存三本、一見嘉靖板か、唯くも萬曆初年の刊本らしい。紙質も三本を通じて一樣に其頃のものらしい白紙であるが、三本十五篇の各板式は一

様でなく、概して略字は多いが、篇によつて字體に多少の差がある。四周單邊、有界、現在の第一本の首の柳耆卿詩酒翫江樓記の第一葉で計つて、匡郭内凡そ五寸五分に四寸、字詰は毎半葉十一行、毎行二十一二字である。

實は此本には、外題や見返は固よりのこと、序跋も目次もなく、従つて編者も總目も知れず、正しい篇次も明でない。そのみならず、御文庫書目(註)の世部に此名で著録されてゐるから、古くから此書名で幕府に傳つたものではあるが、其書名の據る所は頗るあやしい。即ち清平山堂の四字は此本の版心上部に見えてゐるが、十五篇中の四篇(註)には全然見えない。故に約一年の間、余は此本について許多の疑問を懷いてゐた。

頃ろ、先輩倉石學士からの報に、馬隅卿氏の發見によれば、清平山堂の四字は嘉靖版夷堅志の版心上部にもあるといふことであつた。そこで内閣文庫で

更に宋の葉祖榮の類編といはれる新編分類夷堅志を
 調べたところ、なる程、版心上部に此四字があり、
 中部に「夷堅志何集幾卷」とあり、下方に丁數があ
 つて、匡郭や字詰は違ふけれど、見た感じはほど同
 様である。併し内容から見て所謂清平山堂は夷堅志
 ではない。然らば兩書の版心上部の共通なる理由は
 他に求めなければならぬ。

後世刊行者の堂號が書の版心に刻されるときには
 其下方が多い。併し、嘉靖頃の刊本には其堂號が往
 往版心上部に刻される。故に此場合清平山堂は刊行
 者の堂號と解いて差支なからう。然るに嘉靖板の夷
 堅志は洪邁の裔、洪楦字は子美といふものゝ刊する
 所と考へられる、即ち其嘉靖二十五年、田汝成の序
 の末に、

洪君子美者。景盧之遙胃也。爲太保襄惠公之元孫。
 秀雅而文。刻是書而傳之。庶幾乎不墜手澤之遺者。
 後昆繩繩。則洪氏之食報猶未艾也。

とあり、又近刊の葉德輝の書林餘話卷下に
 明洪楦清平山堂刻有宋洪邁夷堅志。……
 と記されてゐる。

是に由つて之を觀れば、此十五篇は洪楦の刻する
 所の一叢刻の殘本であり、或は楦の編纂物であるか
 も知れない。此上は楦の傳を考へて、其等の事項を
 明にすべきであるが、今さしあつて其傳が檢べら
 れないから闕しておく。

此本の正しい書名はかやうに判らないが、今便宜
 上從來の稱呼清平山堂を書名として論を進めてゆ
 く。

さて其十五篇とは

柳耆卿詩酒翫江樓記

簡貼和尚

西湖三塔記

合同文字記

風月瑞仙亭

陰隣積善

陳巡檢梅嶺失妻記

五戒禪師私紅蓮記

勿頸鴛鴦會

楊溫欄路虎傳

藍橋記

快嘴李翠蓮記

洛陽三怪記

風月相思

張子房慕道記

で、京本通俗小説とは一篇も重複してゐないが、也是園藏書目と比較すると、簡貼和尚の一篇は題名が略々一致し、且古今小説の簡帖僧巧騙皇甫妻と本文が大同小異である外、本書の西湖三塔記は即ち書目の西湖三塔であらう。

更に通俗小説に於て試みた如く、本書と三言二拍とを比較すると、簡貼和尚の外、陳巡檢梅嶺失妻記

は古今小説の陳從善梅嶺失渾家と、勿頸鴛鴦會は通

言の蔣淑真勿頸鴛鴦會と本文が大同小異で、五戒禪

師私紅蓮記は古今小説の明悟禪師豎五戒の前半と略

同じく、後半の托生後の話は古今小説の方が餘程長

くなつてゐる。繡谷春容卷十二の東坡佛印二世相會

も大體是であるが、却つて五戒禪師私紅蓮記より稍、

末尾が短い。合同文字記は拍案驚奇の張員外義撫懸

蛤子、包龍圖智賺合同文と話の筋は大體似てゐる

が、全篇を通じて驚奇の方が複雑で、且人物の名が

同音乍ら異つてゐる。風月瑞仙亭は通言の僉仲舉題

詩遇上皇の入話にある卓文君の話（即ち三桂堂本の

卓文君慧眼識相如）の一篇よりも稍々悉しい。其外、

柳耆卿詩酒翫江樓記は古今小説の衆名姬春風吊柳七

と同じく柳耆卿を扱つたものではあるが、前者は餘

杭の官妓周月仙との話柄を述べたもので、後者は其

間に於ける耆卿の立場を美化し、且一篇の中心は江

州の名妓謝玉英との情事にあつて、此篇は寧ろ萬錦

情林卷一や繡谷春容卷四や燕居筆記所收のものに本文が近い。藍橋記は繡谷春容卷四所載のものよりは稍々詳しいが、萬錦情林卷二や燕居筆記や豔異編所收のものよりはかなり簡單である。又陰陽積善は拍案驚奇の袁尙寶相術動名郷、鄭舍人陰功叨世爵の入話と大體同じである。

本書には明かに明代の話が入つてゐる。即ち風月相思が洪武の話である。漢唐の話もあるが、時代の稱呼について、我朝とか、先朝とかいふ用例は總じて一つもない。宋朝を稱しては、我宋とよんでゐるものはなく、或は大宋といひ、

大宋徽宗宣和三年(陳巡檢梅嶺夫妻記)。

大宋英宗治平年間(五戒禪師私紅蓮記)。

或は寧ろ後世からの稱呼と思はれる

當時是宋神宗朝間(柳耆卿詩酒翫江樓記)。

是時宋孝宗淳熙年間(簡貼和尚)。

宋仁宗朝慶曆年間(合同文字記)。

といふ例が目につくばかりである。併し

昔日東京有一員外(快嘴李翠蓮記)。

といふ書法は、東京といつて、而も昔日との間に朝廷の名がないから、南宋の人が北宋を指した書き振ららしい。

然るに其内容をも少し詳しくみれば、確に宋代のものといへる所がある。即ち洛陽三恠記の初部分に、

且說。西京河南府。又名洛陽。這西京有一縣。喚做壽安縣。在西京羅城外。縣內有一座山。喚做壽安山。其中有萬種名花異草。今時臨安府官巷口花市。喚是壽安坊。便是這箇故事。

とある。臨安府が杭州の南宋のときの稱呼であることはいふまでもなく、其南宋の地名をそのまま用ひ、其上に今時と稱へてゐるからには、疑もなく南宋時代首都臨安府で作られた話の面影を明かに残してゐるものといはずばなるまい。

又合同文字記の初に

話説。宋仁宗朝慶曆年間。去這、東京、汴、梁、城。離城

三十里。有箇村。喚做老兒村。

とあり、陳巡檢梅嶺失妻記の初に

話説。大宋徽宗宣和三年上春間。皇榜招賢。大開

選場云。這、東京、汴、梁、城、内……。

とあり、五戒禪師私紅蓮記の首に

話説。大采英治平年間。去這、浙江、路、寧、海、軍。錢塘

門外……。

とある、それらの「這」の字は其前に承けるものがない、そして其下にある地名は宋代の稱呼そのまゝである、殊に三例の内二つは「去這……」のいひ方である。さうすれば、大體に於て此三篇は「這」の下に見える土地に於ける宋代の原作物らしく思はれる。但し、支那語に於ては「這」とか、「那」とかいふ詞は、意味に關係なく、口調の方より加へられることがあるから、此は絶對にはいへない。

四 京本通俗小説の眞偽

多少はともあれ、清平山堂十五篇中には確に宋代の原作物と思へる痕跡が存してゐることは上述の如くである。然るに清平山堂には一箇所として宋人小説とは標してゐない。僅かに卷末の題名に、或は新編小説、或はたゞ小説と冠してゐるだけである。それだけに其痕跡はわざ／＼作り上げたものとは考へられない。

そして京本通俗小説も清平山堂も、何れも也是園藏書目に著録されてゐるものと一部分符合し、三言と重複するものに於ては其異同の程度も、五戒禪師私紅蓮記や柳耆卿詩酒翫江樓記などを例外とすれば、大體同様である。一概に兩書の形式を考へても同じやうに思はれる。

さうすれば京本通俗小説に對する前述の疑問は解いて差支あるまい、殊に三言の類から僞作したもの

なら、也是圍藏書目を引證しても少し僞作出來たる筈である。

やはり普通に考へて、三言は其材料をこの兩書の類から仰いだと考ふべきである。従つて時代の稱呼に於ても陳巡檢梅嶺失妻記に於ける前例の「這」の字が古今小説の陳從善梅嶺失渾家にもそのまゝ残つた。兩書に其由來を求めることは出來ないが、古今小説の木綿菴鄧虎臣報冤の一篇中にも

今日宋朝南渡之後。雖然夷勢猖獗。中原人心不忘趙氏。

などといふ南宋の遺物が残つてゐる。偶然といへる此等の痕跡を見ても、三言に於ける「宋人小説」云云の語も故意の附加でないといへよう。

五 萬曆板俗本四種

なほ内閣文庫にはなほ一種の話本の系統を引いた

我々にとつての貴重書がある。それは内閣文庫第二部漢籍目錄にも見えてゐる

馮伯玉風月相思小説

孔淑芳雙魚扇墜傳

蘇長公章臺柳傳

張生彩鸞燈傳

の四冊で、孔淑芳雙魚扇墜傳にのみ一頁大の挿繪がある外、板式といひ、紙質といひ、四冊共同様であり、四周雙邊、有界、每半葉七行行十六字、匡郭内縦六寸二分乃至五分、横三寸七八分、略字が多い。各冊共分量が甚だ少く、或は一叢書の分冊かとも思はれるが、同時代に同一書肆から同一種類の本を出版したものであるため、かく類似の形式を具へてゐるのであらう。張生彩鸞燈傳の首に「熊龍峯刊行」とあり、板式から考へて萬曆頃の俗書と考へられる。勿論編者の姓名も序もない。單に此四種のみならず同板式の熊氏刊本は其他にもあつたであらう。

内容は宋明各二種、何れも也是園藏書目には見えてゐないが、張生彩鸞燈傳は古今小説の張舜美元宵得麗女と略々一致し、馮伯玉風月相思小説は清平山堂の風月相思と大同小異、又國色天香卷八にも相思記と題して見えてゐる。

此書もまづ前二書と同日に論じてよ。

六 各篇の形式

京本通俗小説が明末以後の偽作物でないことは論じた。内閣文庫に傳つてゐる貴重な兩種についても一通の解題を試みた。そこで是等の各書について話本らしい箇所を尋ねて見よう。

話本として最も普通な形式は本題の話に入る前、短篇の故事⁽¹⁾を引いて來て、それから「説話的」とか「話説」といつて本文を書き出してゐる。錯斬崔寧に此ゆき方を

且先引下一個故事來。權做個得勝頭廻。

といつてゐる、或は故事の代りに古人の詩詞をよせあつめて説明したものもある。菩薩蠻を除く京本通俗小説の各篇、清平山堂の簡貼和尚・西湖三塔記・勿頭鴛鴦會・洛陽三怪記、及び張生彩鸞燈傳等は何れもさうである、其中、碾玉觀音・西山一窟鬼と、西湖の山水の美を稱へた西湖三塔記や、短い乍らも春景の美を歌詞を擧げて説いた洛陽三怪記の書き出しが後者の例である。そしてそれらと本文との間には多く詩詞や詩句諺語を挿入する。

此前置きの文はなくとも、篇首を詩詞で起し、又詩詞で結ぶことは、一二の例外を除いて皆さうである。洛陽三怪記を除く清平山堂の十四種及び次の短篇の四種には、何れも此詩詞に先立つて「入話」の二字を加へてゐる、つまり此詩詞を唱つてだん／＼と本文に入つてゆくのもある。⁽²⁾

先づ詩詞を詠じて聽者の注意を惹き、次第に本文

に入る、此は古今を通じて語り手の常套手段となつてゐる。所謂説書のはさうであり、今それ／＼南北の語り物を代表してゐる彈詞や鼓詞の原形も多く此調子であり、桃花扇傳奇に見ゆる柳敬亭の鼓詞亦同様である。私は今、あまり前人の引用しない醒世恆言中に見える説平話的の例を擧げてみよう。恆言には特に道情といふ語り物としてゐる。

恆言卷三十八、李道人獨步雲門の一篇に、青州の染坊の李清が仙を好んで入仙はしたが、誓を破つて仙界を逐はれて青州に還つたが、一人の熟知も見えないといふわが浦島のやうな話がある。李清はふと東嶽廟前で盲目の老人の漁鼓簡の響をきいて、其老人について我が家の零落をきいた一段がある。

那瞽者聽信衆人。遂敲動漁鼓簡板。先念出四句詩來道。

暑往寒來春復秋

夕陽橋下水東流

將軍戰馬今何在

野艸閒花滿地愁

念了這四句詩。次第敷衍正傳。乃是莊子歎骷髏一段話文。

話では唐代のこととなつてゐるが、勿論私は宋朝、又は明代の瞽者の説話振をよく傳へてゐるものと思ふ。そのつゞきに瞽者が錢を覚める狀況がよく描寫されてゐるから、序に引いておく。

却好是個牛本。瞽者就住了鼓簡。待掠錢足了。方纔又說。此乃是説平話的常矩。誰知衆人聽話時。

一團高興。到出錢時。面面相覷。都不肯出手。又有身邊沒有錢的。假意說幾句冷話。佯佯的走開去了。

一段の終りに近づいて、誰がいふとはなしに散つてゆく聽衆の様子が眼のあたりに映ずる。

單に首尾ばかりではない、本文の間にも折々詩詞駢文、又は詩句諺語を挿入する。是が詩話・詞話の名ある所以で、要するに聽衆の感興を一段惹き起すためのものである。地の文としては、美人の形容に生

得といつてならべたものが多く、但見と記して景色を描写したものも少くない。清平山堂の西湖三塔記や張子房慕道記などにはなか／＼多い。併し已に無味單調を避けるためのものであるからには、菩薩蠻や風月相思(8)などのやうに登場人物間に澤山詩詞の應酬がある篇は、其上に又地の文に韻文を加へなどはしてゐない。清平山堂の快嘴李翠蓮記の翠蓮が早口に語る言葉などは他の韻文などのやうに字を下げて記されてゐるが、此も面白く節づけて歌はれたのであらう。

なほ面白きは剔頭鴛鴦會の一篇である。先づ杭州府武林門外の蔣家の女淑珞(9)の美を述べ、婚姻の機を得ざるを敘し、

未知此女幾時得偶素願。因成商調醋葫蘆小令十篇。
繫于事後。少述斯女始末之情。奉勞歌伴。先听格律。後听蕪詞。

と記して、詞を配し、又少し話をつゞけて

奉勞歌伴。再和前聲。

と記して又歌を配し、かくの如く詞と文とを互に配して話を進めてゆく調子である。此はかの名高い趙德麟の鼓子詞、元微之崔鶯鶯商調蝶戀花詞十闕(10)と思ひ合すと非常に面白く、いかにも語り物らしい。ただ明かに宋のものであるといふ證據がないのが残念である。

清平山堂には、此外に最も話本として相應しい文字が見える。それは簡貼和尚の末に「話本說徹。且作散場。」とあり、合同文字記、陳巡檢梅嶺失妻記及び單行の張生彩鸞燈傳には「話本說徹。權作散場。」とあることである、一段の説話を了り、暫く休憩を宣する所としては最も似合はしい言葉である。此が清平山堂や短篇の四種中に僅か乍ら見える話本らしい所である。

七 結 論

京本通俗小説・清平山堂及びかの四篇の單行本は如何にして、又如何なる目的で作られたものであらうか、それには所謂唱本の沿革を調べねばならぬ。其詳しいことは後日に譲つて、今略述してみよう。

説話を編み出す人は、何れの時代に於ても、或は前代の書物に材料を採り、或は當代の事件を早速面白く讀みこむ。實際テキストを作つてみることもないとはいへまいが、劇の脚本なら兎も角、説平書的などはまづそんなことはしまい。しかし、其説話が世上で相當に人氣を博したならば文字に表されることもあらう、南宋の末近くなど、印刷もかなり普及してゐたから、極く粗末な刊本も或はあらはれたであらう。唱ひ物なり語り物に關しては、今の唱本の類も生じたであらう。併し、かゝる粗末な冊子は永く傳らないのが當然である。別に師弟傳授の用のテ

キストの存在も考へられるが、素人が習ふときは別として、弟子が師匠に就くときは、古今共に口授らしい。⁽⁸⁾

已に文字に表されると幾分の變化を生ずることが多い、かくて漸く讀み本となつて、小説の領域に入り、讀んで其話の筋を味ふ程度になる、其本も粗末なものから漸く體裁が整つてくる、寫本から刊本となつてくる、そして時代の稱呼が時と共に變つてゆくのは勿論、本來の語り物の性質が次第に失せてゆく。私は京本通俗小説を此初期に近い讀み本であらうと思ふ。語り物そのまゝが傳らずに、文字なども少しづつ變つて來てゐるであらう。鈔本の原本は或は宋末元初の坊刻本かも知れない。

明代にも語り物、特に琵琶を彈ずる陶真といふ替者の語り物が、南北を通じてかなり流行してゐたらしい。⁽⁹⁾ 其説く所には趙宋の事柄が多かつたといふこ

とが青木學士も引用された⁽⁸⁾明の田汝成の西湖遊覽志
餘卷二十に

杭州男女瞽者。多學琵琶。唱古今小說平話。以爲
衣食。謂之陶真。大抵說宋時事。蓋汴京遺俗也。
瞿宗吉過汴梁詩云。……陌頭盲女無愁恨。能撥琵
琶說趙家。其俗與杭無異。

と見えてゐる。

一般に陶真のみならず、語り物の材料には、宋以
來のものを、或は時代の稱呼をかへ、或は地名など
を當時の稱謂に改めて用ひたものもあらうし、新古
の語柄を又新に編んだものもあらう。そして其語り
物の流行と共に其テキストや、之に胚胎した出版物
が現れることは不思議ではない。

馮伯玉風月相思小説等の四種は其紙質や板式やら
が甚だ粗末であり、略字が甚だ多いことから考へて
も、此種の出版物の初歩のものと考へられる。挿繪
があることは讀み本への一步の進展を認め得るが、

ともかくも一叢書をなした京本通俗小説の程度まで
は進んでゐない⁽⁹⁾。

清平山堂は此四種に比して讀み本としての進化が
見られる、京本通俗小説のやうに合刻されてゐる其
各内容には、宋代の初歩の讀み本を、多少之に手を
加へ乍らも受けついだものもあらうし、讀者の感興
を惹くため、明代の語り物をとりに入れたものもあら
う。従つて前者中には宋代の原作の痕跡が見られる
のである。後者の中には明代の話もあらうし、其以
前の話もあらう。故に十五篇の盡くを此兩者に分つ
ことは不可能である。かくて本書も讀み本ながら、
なほ語り物の痕跡をも含んでゐる。

なほ吾人をして興味を覺えしめるものは、西湖遊
覽志餘の前引の文につゞいて

若紅蓮・柳翠・雷峯塔・雙魚扇墜等記。皆杭州
異事。或近世所擬作者也。

とあつて、孔淑芳雙魚扇墜傳や清平山堂中の五戒禪

師私紅蓮記などが當時語られてゐた事實が明かであることである。

要するに以上三種の書は説話が小説へと變化してゆく階梯であつて、其形式の上からいつても、内容の方からいつても、小説史の研究の貴重な材料といはなければならぬ。

八 餘 論

序に三言二拍や、その中から更に四十種を選んだ今古奇觀(83)について簡單に論及するならば、此等は以上三種よりも一層讀み本としての程度が進んだもので、一部づつの短篇小説集としての外觀を有してゐるが、其三言二拍の濫觴といはれてゐる古今小説の序にも

若通俗演義。不知何昉。按南宋供奉局。有說話人。如今說書之流。其文必通俗。其作者莫可考。泥馬

倦勤。以太上享天下之養。仁壽清暇。喜閱話本。命內瑞。日進一帙。當意則以金錢厚酬。於是內瑞輩。廣求先代奇蹟。及閩里新聞。倩人數演進御。以怡天顏。然一覽輒置。卒多浮沉內庭。其傳布民間者。什不二耳。然如翫江樓。雙魚陸記等類。又皆鄙俚淺薄。齒牙不馨焉。

と、其源流を南宋から説き起してゐる。固より小説家者流の言、多少小説を權威づける爲のものではあるが、三言二拍の由來する所が説話のテキスト、即ち話本であることは、所謂說話人の言動がよく村夫稚子、里婦估兒の是非批判の標準となることをのべた古今小説や警世通言の序中の言(84)と共に十分に自ら之を説明してゐる。而も古今小説の序中に鄙俚淺薄なものとして擧げられた二篇が共に前述の二種の刊本に含まれてゐるのは面白い。

此ことはたゞ序文にさういつてゐるばかりではない。内容からみても説話の痕跡が認められる。形式

に於て、詩詞が入つてゐるのはいふまでもなく、又「這段話」とかいふところに、或は話文とか話本とかいひ、或は詞話の語を用ひ、或は又評話の二字を使つてゐる。そして、

這話本是京師老郎流傳。

原係京師老郎傳流。至今編入野史。

這本話文。叫做積善陰騭。□是京師老郎傳留至今。

などと、昔からの傳來のものであると稱し、殊に、「且聽下回分解」や「聽我說來」どころではない、讀み本として相應しくない、

如今在下再說個先憂後樂的故事。列位看官們。內中倘有胯下忍辱的韓信。妻不下機的蘇秦。聽在下說這段評話。各人回去。硬挺着頭頸。過日以待時來。不要先墜了志氣。有詩四句。

若有別樁希奇故事。異樣話文。再講回出來。列位看官穩坐着。莫要性急。適來小子道。這段小故事。

原是入話。還未曾說到正傳。

今日聽在下說一樁俞伯牙的故事。列位看官們。要聽者洗耳而聽。不要聽者。各隨尊便。

などの例がある。更に二刻拍案驚奇卷十二、硬搥案大儒爭閒氣、甘受刑俠女著芳名の篇首には

看官聽說。從來說的書。不過談些風月。述些異聞。圖个好聽。最有益的。論些世情。說些因果。等聽了的。觸着心裏。把平日邪路念頭。化將轉來。這箇就是說書的一片道學心腸。却從不會講着道學。

而今爲甚麼說箇不可有成心。只爲人心最靈。專是那空虛的纔有公道。一點成心入在肚裏。把好歹多錯認了。就是聖賢。也要偏執起來。自以爲是。却不知事體竟不是這樣的了。

などと記した處、愈々話本らしい。

之を要するに此種の短篇小説集は宋代の説話に由來して、漸く讀み本の域に達した。併し、遂に全くは話本としての性質を脱却しない、一種の形式を殘した。今古奇觀以後の此種の選本は、何れも今古奇

観ほどの流行を見なかつたが、形式は大同小異である。そして此種の短篇小説集は、水滸・三國や紅樓夢などと共に今日の語り物や辻講釋の種本となつてゐる。それらの沿革的記述は後日に譲る。

注

(1) 語り物とか辻講釋とか、曖昧な言葉を用ひたが、私は是等の語をかやうに説くつもりである。語り物とは唱のみで成立つ所謂唱ひ物の歌詞の間に、之を結びつけるための敘述の體が入つて來てゐるもの、しかし、其敘述の文はやはり普通の語振とは非常に差のある——節づけられて、所謂語られてゆくものを目指す。勿論その場合に樂器の伴奏があつて差支ない、否、むしろあるのが當然である。講談といはず、辻講釋といつたのは特に深い意味はないが、講談といふとすぐに今日の日本の寄席でやつてゐる講談を想ひ出すので、道路の傍や、所謂盛り場の隅に簡單に小屋掛して、民衆を相手に話し出す様子を想見するために故ら此三字を用ひたまでである。此辻講釋とて固より普通の談話振とは多少調子が變つてゐる譯であるが、語り物ほど節奏がない。勿論詩などは吟じられたであらうが。

今の支那の状態といへば、唱ひ物はいふまでもない、所謂小唄とか時調とかよばれてゐる流行唄などが是で、語り物は北の故

詞、南の彈詞が之を代表し、北方で所謂説書的が辻講釋にあたる。語り物の例を今の日本に求めるなら、青木學士といはれたやうに浪花節といふのがよからう。

下に列擧する宋代の文獻には説話の語を以て、時代物も世話物も之を總稱してゐる。それらが如何にして語されたかは明でないが、時代物、即ち演義小説、一口でいへば軍談のやうなものと、世話物、殊に其大部分を以てゐる管の鹽物とは多少ちがつた方法で語ぜられたやうな氣がしてならない。後者の中には語り物といひうるものがあつたのではあるまいか。

なほ語り物については青木學士が次のやうな論文をもよされてゐる。

青木正見氏、語り物の源流(支那學一ノ一二、大正十年、弘文堂刊「支那文藝論叢」中に増補されて收められてゐる)。

同氏、熾煌遺書「目連緣起」「大目乾連冥間救母變文」及び「降魔變神座文」に就て(支那學四ノ三、昭和二年)。

(2) 胡懷琛氏、中國小説研究(七)(小説世界一六ノ二三、民國十六年)。

(3) 狩野直喜氏、支那俗文學史研究の材料(下)(藝文七ノ三、大正五年、弘文堂刊「支那學文叢」所收)。

倉石武四郎氏、「目連變文」紹介の後に(支那學四ノ三、昭和二年)。

及び(1)に擧げたる青木正見氏の論文参照。

(4) 明、耶瑛、七修類稿卷二十二等。

(5) 宋、孟元老、東京夢華錄卷五、「京瓦伎藝」。

宋、吳自牧、夢梁錄卷二十、「小說講經史」。

宋、耐得翁、都城紀勝、「瓦舍衆伎」。

宋、周密、武林舊事卷六、「諸色伎藝人」。

第一は北宋、第二、三、四は南宋についてゐる。

(6) 明の小説「三言」に就て(一)(斯文八ノ五、大正十五年)。

(7) 支那俗文學史研究の材料(藝文七ノ一、三)を參照。

中國小説史略(民國十四年北新書局刊)第十二篇。

(8) (一)參照。

(9) 三言二拍については已に

鹽谷溫氏、明の小説「三言」に就て(斯文八ノ五、六、七、大正十五年)。

馬廉氏、明代之通俗短篇小説(孔德月刊一、二、民國十五年)。

同氏、關于白話短篇小説「三言」「二拍」(語絲一一一、民國十五年)。

辛島曉氏、警世通言三種(斯文九ノ一、昭和二年)。

鄭振鐸氏、巴黎國家圖書館中之中國小説與戲曲(小説月報一八ノ一一、民國十六年)。

の參考すべき論文があるが、其後世に紹介された本もあり、又多少余の別に考へた點もあるから、煩しくはあるが左に略述する、悉しくは折をみて別に發表する。

京本通俗小説と清平山堂

三言とは喻世明言・警世通言・醒世恆言、二拍とは拍案驚奇の初刻と二刻、今古奇觀の序に其名が見えてゐる。

此等の叢刻の權輿ともいふべきものは古今小説四十種で、馮夢龍の藏する古今通俗小説中より選んだ一百二十種の内から、先づ其三分の一を天許齋主人が刊行したもの、幸に我が内閣文庫に傳つてゐる。其殘りの八十種も夙に刊行されたらしいが、それらしいものは残念乍らみつからない。

三言の名が何時起つて、其書が何時完成されたかは未だに判らない。同一人の手によつて出版された三言の刊本といふものは今は行慶堂刊本より傳つてゐない。行慶堂所刊の明言は内閣に傳り、通言は滿鐵の大連圖書館に存し、恆言は坊間に往々見うけるものである。其中で前二書は明に衍慶堂が求板の上、勝手に組合せて印行したもので、その原板の二が古今小説、一が徳川侯爵家蔵左文庫所藏の兼善堂所刊の通言らしい。此二部以外にもある筈であるが、その原板はまだ知れぬ。

内閣文庫所藏の明言は二刻増補古今小説と其由来する所を見返に明記してゐるが、實は二十四巻しかなく、而も口繪は本文と一致しない。使へる板木を勝手によせあつめて印行したものである。大連圖書館所藏の通言も亦二刻増補と見返に題したもので、此は兼善堂刊本の缺を天許齋刊本の古今小説四篇で補つた四十巻本といへよう。恆言は明に清朝の改刻である。

兼善堂所刊の通言は行慶堂所刊本よりは古いが、此も目次と本

文と版心との巻数が一致せず、他本によつたものと考へられる。又内閣文庫所蔵の葉敬池刊本の醒世恆言四十卷（大連圖書館所蔵の葉敬池刊本は其後印）も衍慶堂刊本の明言と内容の重複部分が異板で、崇禎頃の改刻本らしい。

三桂堂刊本の通言（北京孔德學校及び馬廉氏所蔵）は清刊本、二刻増補本即ち衍慶堂刊本より後のものである。此本に於ける卓文君悲眼識相如の一篇は馬氏の言の如く兪仲舉題詩遇上皇の入話を割いて來たもので、而も本文は三十六卷、口繪は改刻せず、衍慶堂本の巻数を除き、書面の文字をも削つたものらしく、且枚数が足りない。孔德學校藏本は馬氏藏本に比して口繪が一枚少くて合計十九、且馬氏藏本の缺葉が他の部分より新しい感じのする板で補はれてゐて、又全體の破損部分の比較によつて其後印と考へられる。中川忠英の舶載書目に著録されてゐる三桂堂刊の四十卷本は馬氏藏本より稍古いのであらう。

此外に恒言には、衍慶堂刊本の卷二十三金海陵縱欲亡身的一篇を除いて、卷二十張廷秀逃生救父を上下に分ち、従つて卷二十一張淑兒巧智脫楊生を卷二十三に埋めた本（東京外國語學校所蔵）がある。此は金海陵の一篇の内容が淫に過ぎてゐる爲に後印本では除いたのであらう。

總じて以上三言の各刊本には、内容の順次に差があるのみならず、恒言の如き、同一の篇中に於て兩刊本間の文字の異同が著しい、よつて本論に於てたゞ三言を論ずるときはそれ／＼既見

書中最古の左の本を指すことにする。

醒世明言 内閣文庫所蔵衍慶堂刊本

警世通言 蓬左文庫所蔵葉敬池刊本

醒世恆言 内閣文庫所蔵葉敬池刊本

三言が馮夢龍の編といはれるのに對し、二拍は凌濛初が之に倣つて編んだものといはれる。其初篇は余の目賸したのも三種、其内では十一行二十四字詰の大本（帝國圖書館・大連圖書館及び北京燕京華文學校所蔵）が最も古い、二刻本の序の言に反して三十六種しかなく、清初の刻本である。通行の大本及び巾箱本は足本ではない。二刻本に於ては十行二十字本（内閣文庫所蔵）の外見ないが、此本の末卷は一篇の雜劇であり、而も其目錄を見ると、此末篇及び、二拍到重複して、共に第二十三卷である大姊魂游完宿願、小姨病起續前緣の一篇の題名の字體が恰も後に締つたかと思へる位に他篇と異り、且第二十三卷の本文のみ大題に二刻の二字がない。故に余は外に未見の四十卷本で互に重複のない各四十巻より成る原刻初印本の二拍の存在を想像する。巴里の國家圖書館所蔵の三十四卷本の二刻本は固より後印本であらう。又舶載書目著録本は別のものである。

世に最も流行してゐる今古奇觀（編次に二種あり、又後の本は足本でない）は明室の滅亡以前に此等三言二拍到内容を求めたものである。

又巴里の國家圖書館には警世雅言といふ書があるといふが、其

序も内容も悉く以上の諸本に出てゐる、恐らく坊買の寄せ集め本であらう。

(10) 跋には實は定州三怪となつてゐるが、警世通言中的一篇、崔衙内白鶴招妖の題下の注と、篇末の

這段話本。則喚做新羅白鶴。定山三怪。

の語とによつて、州は山の誤で、其内容は全體此一篇の如くであらうと考へられる。

(11)(12) 何れも(9)参照。

(13) 木板本の第三十六葉裏、(9)でいへば第二十葉裏。

(14) 内閣文庫所藏清鈔本に據る。玉簡齋叢書本には「小亭兒」と誤つてゐる。

(15) 支那俗文學史研究の材料、(9)参照。

(16) 卷三十三、十五貫戲言成巧禍。なほ葉敬池本よりも衍慶堂本の方が錯斬崔寧と本文の異同が少く、之をみても葉敬池本以前に行慶堂本の依據した刻本の存在が想像される。

(17) 宋明通俗小説傳流表(斯文八ノ九附錄、大正十五年)。

(18) 碾玉觀音——醒世恆言卷八、崔待詔生死冤家、

菩薩蠻——卷七、陣可常端陽仙化、

西山一窟鬼——卷十四、一窟鬼竊道人除怪、

志誠張主管——卷十六、小夫人金錢贈年少(張主管志誠脫奇禍)、

拗相公——卷四、拗相公飲恨半山堂、

馮玉梅團圓——卷十二、范蠡兒雙鏡團圓。

京本通俗小説と清平山堂

(19) 稍目立つた差は碾玉觀音の上下の間に、通言には「遣漢子畢竟是何人、且聽下回分解。」の一行があること、馮玉梅團圓中の人名、劉俊卿が列俊卿、馮忠翹が呂忠翹、玉梅が順哥、張所

が張波、張波が張榮と通言になつてゐること、の二條位、而も殊に後者は於ては通言の原刻本ともいふべきものにもさうなつてゐるかどうか判らないのである。外に我朝の稱呼其他僅少の差がある。

(20) 篇末に

話名只喚做山亭兒、亦名十條龍陶鐵僧孝義尹宗事跡。

と明記してある。

(21) (9)参照。

(22) 後者に於ては前述の如く流布の單行本を通俗小説中の一篇と考へることは出来ぬが。

(23) 本篇の頭注に、宋人小説云々及び宋時小説云々の語もある。

(24) 恆言卷五、大樹坡義虎送親題下の注に「一名虎媒記、又名虎報恩」、通言卷二十三、樂小舍拚生冤偶題下の注に「一名喜樂和順記」。

(25) 通言卷二十、計押番金鑿產禍題下の注に「舊名金鑿記」。別に卷二十四、玉堂春落難逢夫(兼審善本にのみ見える)題下の注に「與舊刻王公子奮志記不同。古今小説卷七、羊角哀捨命全交題下の注に「一本作羊角哀一死戰荊軻」。題下に別名が注されてゐるのは以上にとゞまる。

(27) 靜嘉堂文庫所藏、寫本三冊、著録されてゐる書物から考へて紅葉山のものであることは明である。著録の方法は、書名をいふは別にして、其各を寛永十六年以降、享保七年までの年號別にしてある。多分其年號は其所藏に歸した時を示すものであらう。部によつては寛永十六年の分以前にも書名が列擧されてゐる、此は其以前の收藏本であらう。清平山堂は此分の中に著録されてゐるが、冊数が記入もれとなつてゐるので、其時から十五篇のみであつたか明確でないが、恐らく當時から缺本であつたのであらう。

(27) 西湖三塔記・風月瑞仙亭・洛陽三怵記・風月相思の四篇。

(28) 靜嘉堂文庫所藏本の一部から其例を覚めると、

嘉靖中沈勸楚山書屋刊東軒筆錄（湖北先正遺書中に其影印本がある）

版心 楚山書屋一卷之幾一

嘉靖中前山書屋刊山海經

版心 前山書屋一山海經卷幾一

嘉靖中吳琛寶文堂刊法藏碎金錄

版心 吳氏寶文堂一法藏碎金錄卷幾一

嘉靖中錫山安國刊顏魯公文集

版心 錫山安氏館一魯公文集卷之幾一

などがある、勿論時代の外に刊行地の關係もあらうが、或は版心上部に刊行者の堂號の見ゆるものは大體嘉靖版であるといひ

うるかも知れない、いづれ此もゆつくり實例について考へて見たい。勿論以上の例にあげた版心下部には丁數がある。

(29) 首に「簡貼和尙、亦名胡姑と、又名錯下書、公案傳奇。」とあり、板心には所々東貼和尙とある。簡貼和尙とはない。

(30) 「一名三送命、一名冤報究」と注し、也是閑藏書目の女報究と題が似てゐるが、此話は二先夫が女に冤を報じたものである。ことによつたら書目の誤で、實は兩者が同じものかも知れぬ。

(31) 十二卷、萬曆頃のもの、撰者未考。卷頭は「選鏡騷壇搥粹嚼騷譚苑」。今、通行本による。此書は下に出でくる國色天香を始め、燕居筆記・萬錦情林や又は花陣綺言などと大凡同様な内容の書である。

(32) 東京帝國大學支那哲文學研究會藏本に據る。同書は六卷、余象斗纂、萬曆戊戌（二二）余氏雙峯堂刊、卷首題名には「新刻芸窓樂爽」となつてゐる。

(33) 明末のもの、原著者未考。圖書寮所藏巾箱本増補批點圖像燕居筆記（馮夢龍増補、余公仁刊）の卷七、内閣文庫所藏の新刻増補全相燕居筆記（林近陽増編、余酒泉刊）の卷六、同じく重刻増補燕居筆記（金陵李氏刊）の卷十にみえてゐる。なほ燕居筆記には此外に清の刪本がある。

(34) 近いとはいへ、勿論かなり異同がある、むしろ清平山堂以外のもので互によく似てゐる。

(35) 圖書寮藏本の卷七、内閣の全相本でも卷七であるが、此は卷

末が落丁となつてゐる。一本には全然ない。

(30) 作者を王世貞に託してゐる。此にも種々の版があり、内閣の朱墨本なら卷二、新錦玉茗堂批選王弼州先生豎異編なら卷四。

(31) 此等三書間の方がよく似てゐることは前同様である。

(32) 特に通行本には大小二本とも脱脱が頗る多いから、帝國圖書館藏本を指す。

(33) 實は原本には「大采英治平年間」とあるが、明に誤刻と認めらるから今改めた。なほ繡谷春容には勿論「大宋英宗治平年間」となつてゐる。

(34) 例へば大明一統志卷三十八に

宋爲杭州。高宗南渡。遷都於杭。陞爲臨安府。元立兩浙都督府。尋改杭州路。本朝改爲杭州府。

(35) 古今小説の陳從善梅嶺失滄家にもこのところはそのままうけて、「道」の字がある。

(36) 今大宋が主要問題でないから、もとのまゝにしておく。(30)を参照。

(37) 此は北宋の稱呼である、即ち大明一統志卷三十八に、

宋初以兩浙爲一路、後分浙東西爲兩路。

又大清一統志卷二百十六に、

宋仍曰杭州餘杭郡。淳化五年。改寧海軍節度。屬四浙路。

とある。固より俗稱に於ては或は古名を用ひ、昔話には或は其逆に判り易くするため現名を用ひ、從つて地名の稱呼のみを

らへて其作物の著作時代を論ずることはできない。

(38) 繡谷春容には「去道」の兩字がない。此が後世からの稱へ方の最も普通な形式である。

(39) 序跋にもないかは判らない、併し假にあつたとしてもよい。三言よりは前のものであるし、如何に明人は好事であらうと、當時それほどはやされなかつた小説にまでこんなことはいまい。

(40) 陳巡檢・紅蓮記・劍頭鴛鴦會・楊温傳・李翠蓮記の五種。

(41) 張子房慕道記の一種。

(42) 一が二十八葉、二が二十七葉、三が十葉、四が二十四葉。

(43) 清版の大小二種が流布してゐるが、此も内閣文庫には萬曆丁酉(二五)の刊本が傳つてゐる。それは「新刻京燕公餘勝覽國色天香一卷」と首題し、「撫金、養純子、吳敬所編輯、書林、萬卷樓、周對峰鑄鏡」と次に記されてゐる。十二卷。卷末本記に「萬曆丁酉春、金陵書林周氏萬卷樓重刻」とあるから、其原刻本はそれ以前にあつたに違ひない。全體の版式は嘉靖版に近い書體であるが、序の末には「萬曆丁亥夏九紫山人謝友可譌于萬卷樓」となつてゐる。丁亥といへば萬曆十五年である、其頃にもこんな氣持の刊本がないかは、かうなつてくると、國色天香が此類の書の最初であらうといふことはいへるが、清平山堂や此短篇四種と何れが先かといふことが問題になる。なほ内閣本は第二卷からは國色天香といはずに「新鏡幽閉(又は間)玩

味趣逸蕪」となつてゐる、或はそれが原名かも知れない。

- (40) 本文に對して此故事を三言などでは、頭回(古今小説の史弘壁龍虎君臣會)、副話(通言の拗相公飲恨半山堂)、入話(復言の徐老僕義憤成家)などといつて、正文(拗相公飲恨半山堂、二拍の韓侍郎婢作夫人)、正傳(徐老僕義憤成家、又は正話(初拍の衛朝奉狼心盤貴産などの四篇及び、二拍の徐茶酒乘間劫新人)など)稱する本文に對する稱としてゐる。

(41) 入話のこの用例は、天啓頃の印行である新鐫批評出相韓湘子にも見受ける。

(42) 中國小説研究、(2)參照。

(43) 今通行の大鼓のテキストには此形が失はれてゐるのが多いが、清末に於ける鼓詞の名家、韓小窗の作といはれてゐる諸曲などはさうであるし、車王府の舊藏で、多分有名な唱本賣りの「百本張」のものであらうといはれてゐる鈔本(今多くは北京孔德學校藏)については確にかういへる。

(44) 聽禪・哭主の二齣。

(45) 青木氏の論文、(1)參照。

(46) 今でも廟會や市場の娛樂物はこんな狀況を呈する。余は此一篇を讀んだ後、或日北京で白塔寺の廟會に警者の大鼓を聽いた。一曲が了りかけたときのあたりの様子は全く同様であつた。

(47) 此は明に明代の作であるが。

(48) 通言には淑貞に作られてゐる。

(49) 清平山堂には、令を合、述を迷などと誤つてゐるが、通言によつて訂正しておいた。

(50) 知不足齋叢書第二十二集所收、侯歸錄卷五に載つてゐる。

(51) 風月瑞仙亭は末尾が缺けてゐるから、此篇には此八字があるかどうか判らぬ。

(52) 現在てまへ鼓艇などは文盲が多い。従つて師弟傳授が行はれた種類のものでは、宋代には勿論大多數口授であつたらう。口授であれば其間に固より多少の變化を生じてゆく。

(53) 例へば明の姜南の琴瑟詩話卷二、洗硯新録の演小説の條に、世之聲者。或男或女。有學彈琵琶。演說古今小説。以覓衣食。北方最多。京師特盛。南京杭州亦有之。

(54) 語り物の源流。(1)參照。なほ此文は錢靜方式も「小説叢考(民國五年上海商務印書館刊)」に引かれた。

(55) 路傍で賣るやうな薄い冊子、大小の差こそあれ、今の北京ていへば打磨廠出版の唱本が之に相當するであらう。此も繪のないのが大部分であるが、中には同じ青肆の出版であり乍ら繪入のものがある、其例は擧げる迄もない。

(56) 其他の内容も判る。柳翠は古今小説にもある月明和尚度柳翠の話であらうし、雷峰塔は警世通言の白娘子永鎮雷峰塔の話であらう。濟顛は單行本の小説もある有名な話であるが、余の既見の本では内閣文庫所藏の隆慶板の錢塘湖隱濟顛大師語録が最

も古い。

(68) 四十篇の内、第三十回の念親恩孝女藏兒のみが今まで知られてゐる三言二拍中にはない、しかし、余は恐らく此も三言二拍中から出たもので、たゞ我々が今日(7)まで原刻初印本の三言二拍をまだ見てゐない爲に判らないのであらうと考へる。

(69) 古今小説の縁天館主人の序には

試今説話人當場描寫。可喜可愕。可悲可涕。可歌可舞。再欲捉刀。再欲下拜。再欲決胆。再欲捐金。怯者勇。淫者貞。薄者敦。頑鈍者汗下。雖曰誦孝經論語。其感人未必如是之捷且深也。噫不通俗而能之乎。

とあり、警世通言の無礙居士の序にも

野史盡眞乎。曰。不必也。盡附乎。曰。不必也。然則去其腐而存其眞乎。曰。不必也。……村夫稚子。里婦估兒。以甲是乙非爲喜怒。以前因後果爲勸懲。以道聽途說爲學問。而通俗演義一種。遂足以佐經書史傳之窮。……其眞者可以補金匱石室之遺。而腐者亦必有一番激揚勸誘悲歡感慨之意。事眞而理不腐。即事腐而理亦眞。不害于風化。不謬于聖賢。不戾于詩書經史。若此者。其可廢乎。

と論じて玄妙觀にて關羽の話を聞きかへりし兒童の、扈に代つて其指を傷けしも痛を呼びさりし話を説書人の言動がよく兒女に影響を興へる實例として引けり。

(7) 語文・語本の用例は擧げるまでもない。

京本通俗小説と清平山堂

(71) 蔣興哥重會珍珠衫(古今小説・喻世明言及び今古奇觀)等。

(72) 蘇知縣離彩再合(警世通言)、鈍秀才一朝交泰(警世通言及び今古奇觀)及び勸皮靴單證二耶神、醒世恆言等。

(73) 史弘農龍虎君臣會(古今小説及び喻世明言)。

(74) 勸皮靴單證二耶神。

(75) 袁尚寶相衝動名鄉、鄉舍人陸叻叻世爵(拍案驚奇)の入口に見えてゐる、積善陰陽の話の末。

(76) 鈍秀才一朝交泰。

(77) 徐老儀義憤成家(醒世恆言及び今古奇觀)。

(78) 俞伯牙摔琴知音(警世通言及び今古奇觀)。

(昭和三、六、二九改稿)